

論 文

文法化の観点から見た日本語敬語形式の通時的変遷試論

森 山 由 紀 子

学芸学部・日本語日本文学科

Abstract

In this paper, I considered the historical change of honorifics, according to the strategy of expressions.

From an etymological point of view, the original meaning of the subject honorifics was “giving something from a higher person to a lower person” but not the subject honorific itself.

Later, new forms that implied the strategy of indirect descriptions became the subject honorifics; at the same time, expressions which meant “receiving a benefit” were also used as some subject honorifics.

The polite style forms (hearer honorifics) originally meant that the speaker was subject to the higher person. Namely, the expression of being under a higher person changed to the hearer-oriented polite form as a style marker. In this grammaticalization to the polite form, it was very important that proto-polite forms were verbs mean “being” which were used in the text many times.

1. はじめに

日本語の敬語形式は、通時的に多様な変遷を重ねてきた。たとえば、同じ「尊敬」という機能を表す生産的な形式だけを見ても、上代の「ース」にはじまり、「ーイマス」「ータマフ」「(ラ)ル」「(御)ーアル」「(御)ーナサル」「(御)ーニナル」まで、様々な形式が入れ替わって用いられてきている。これに、それぞれの異形態を加えると、極めて多くの形式が、一つの機能を表す語として用いられてきたことになる。

これは、たとえば、意志を表す形式が、「ム」から「ウ」へという音韻的な変化以外、基本的

に変化していないことと対照的であると言える。

さらに、こうして次々と登場してきた各時代の敬語形式は、最古形の「ース」を除いて、いずれも、文法化 (grammaticalize) された一本来は、他の具体的な意味を持って独立して用いられていた語が、その本来の意味を失い、敬語という文法的機能を持って用いられるようになった一ものであるということがいえる。つまり、日本語における敬語形式の歴史の変遷は、文法化によって、新たな語が敬語化することの連続であったとも言えるのである。

Traugott & Dasher (2002)、大堀 (2005) など、語用論研究の立場から、文法化という言葉変化の一樣態を説明する事例として、日本語の敬語形式が取り上げられるのは、こういった事情によるものである。中でも、Traugott & Dasher (2002) の6章5節は、一般動詞「サブラフ」が、謙讓語、さらには、丁寧語の補助

動詞「-サブラフ（サウラフ）」へと変化する過程を、主観化・間主観化の事例として詳しくとりあげた。

一方、金水（2005）は、文法化という事象を説明するためではなく、ある文法化が生じた背景を探ることを目的としたものである。具体的には、本来客観性の高い表現であった「御座+ある」という語が、主観化、さらに間主観化することで丁寧語・丁寧語「-ござる」として定着していく過程で、他の丁寧語と異なり、謙讓語経由ではなく、尊敬語経由であったことに着目し、この文法化が生じるに至ったしくみが、存在表現としてのあり方と結びつけて詳しく検証されている。

日本語の敬語史研究の立場から、筆者が関心を持つのは、文法化によって、順次新たな敬語形式が生まれるにあたって、それぞれの時点で、なぜ、その語が選ばれたのかということである。つまり、同じ「尊敬語」の機能を持つ形式であっても、平安時代に尊敬語として用いられるようになった形式が本来持っていた意味と、室町時代に尊敬語として用いられるようになった形式が本来持っていた意味とが異なっているとすれば、それは、それぞれの時代の「敬意」の認知のしかたの違いを反映するのではないかと考えるのである。

ただしこの場合、主観化によって生まれる素材敬語（尊敬語および謙讓語）と、間主観化によって生まれる対者敬語（丁寧語および丁寧語）とは、分けて考える必要があるだろう。なぜならば、主観化——客観的な意味を持つ語が、話者の尊敬や謙讓といった、主観的な意味で用いられるようになる変化——の段階では、その語が本来持っていた意味に基づいて、次の抽象化された意味（尊敬や謙讓）が生みだされるので、本来の語の意味は極めて重要であるといえる。それに対して、その尊敬語や謙讓語が、さらに、発話場面での待遇機能をもって用いられるようになる、間主観化の段階においては、すでに一段階文法化していることによって、「敬意」という意味が加わっている分、本来の

語が持っていた客観的な意味は漂白されているからである。

上記のような関心に基づき、以下、日本語における敬語形式成立の変遷を、文法化の観点から大きく概観してみることにする。もっとも、個々の事例については、それぞれについて詳しく検証を重ねていく必要があることは言うまでもなく、本稿は、個々の検証を前にした、仮説としての概観と位置づけたい。なお、素材敬語については、ここでは尊敬語のみを取り上げることにする。

2. 尊敬語形式の変遷

まず、上代の尊敬語としては、「-ース」「-タマフ」「-(イ)マス」という三つの形式が用いられている。

このうち、「-ース」は、

1 …この岡に ^{なつますこ}菜摘須兒 家きかな
^{なのらきぬ}名告紗根… (万葉集巻1-1)

のように、天皇から娘に対して用いる場合もあれば、

2 …朝狩に ^{たたす}今立須らし 夕狩に ^{たたす}今
^{たたす}他田渚らし… (万葉集巻1-3)

のように、天皇に対して用いられる場合もある。また、上接する動詞の制限は特に認められず、極めて汎用性の高い敬語となっていた可能性がある。しかも、この時期にはすでに、「おもほす」「きこす」「けす」「せす」「めす」「をす」など、多くの敬語動詞を作る要素となっている。しかし、文献上、それ以前の状態に遡ることはできないので、その成立過程を追うことは困難である。その後、この「-ース」という形式は、上記のような敬語語彙の一部に取り込まれたものの以外、「-ース」単独で敬語の意味を添えるために生産的に用いられることはなくなっていく。

では、この「-ース」に代わる尊敬語の形式として選ばれたのは、どの形式だろうか。

まず、「-(イ)マス」について考えてみよう。

吉野（2005）によれば、『古事記』における「-(イ)マス」は、「そういった状態である」という時間的継続相を表す表現で用いられるか、

そうでない場合には、移動動詞に接続して用いられる。そもそも、「(イ)マス」という動詞が単独で用いられた場合には、敬意の対象である人物（以下「尊者」という）が存在することを表す。それが、「移動」という、「存在」を内包する行為を表現する際にも同様に用いられたと考えられる。そういった点から言えば、「(イ)マス」は、尊者の存在を表現するという、実質的な意味合いを残す形式であって、尊敬の意味を添える形式として、完全に文法化しているとは言えない側面があったといえる。そしてそのまま、それ以上文法化することなく、次第に用いられなくなっていったのである。

残る、「一タマフ」という形式は、単独で用いられる場合には、上位者から下位者に物品を給するという実質的な意味を持つ。しかし、次のような形で、他の語について用いられる場合には、すでに、そういった意味合いは失われているといえる。

- 3 是に於いて、天皇患^{わづらひたまひ} 賜て、御寝の時…
(垂仁記)
- 4 …なびかひの宜しき君が 朝宮を忘賜^{わすれたまひ}や
夕宮^{そむき}を背賜^{せたまひ}や… (万葉集・巻2・196)
- 5 ありつつも 御見多麻波むそ 大殿の
ことほとりの 雪な踏みそね
(万葉集・巻19・4228)

これらの例においては、「患う」「宮殿を忘れる」「宮殿を離れる」「雪を見る」のように、誰かが特に利益を得るというわけではない行為についてまで、「一タマフ」という語が用いられ、本来の意味を離れて、完全に「尊敬」を表す語となっている。

このような意味の転用の背景には、「タマフ」という語本来の、「上位者から下位者に向けて物品が下される」という意味のうち、「上位者が下す」という意味のみを残して、動詞に下接して用いることで、「その行為が上位者の行為である」ということを表すというメカニズムが推定される。そして、「その行為が上位者の行為である」と認定して表現することによって、話し手にとっての尊者の位置づけが表明される

のである。これがすなわち、「タマフ」の主観化であり、尊敬語を作る文法的な形式の成立である。

では、その過程を示す資料が見つけれられるかということであるが、森山（1998・1999）では、『古事記』における「一タマフ」が、支配者から被支配者への下向きの方向性を持つ行為や、話し手への行為である場合には用いられるけれども、そういった意味合いがない場合には、一例の例外を除いて用いられないという制限があることを述べた。これは、「一タマフ」もやはり、本来の「上位者が下位者に給する（下位者が上位者に「もらう」ではない）」という意味を残しつつ用いられていた時期があることを示唆する。

しかし、『古事記』にはただ一例、先にあげた「患賜」の例、すなわち、「患う」という、支配者としての下向きの行為でも視点者への行為でもない例がある。この、「ただ一例」を、どのように解釈するかが、問題であろう。確実に実証する術はないけれども『古事記』に反映されている言葉の一部が、口承に基づくものであることを考えれば、そこで用いられている「一タマフ」が、基本的に古態を残しているという可能性があるのではないか。そして、最終的に『古事記』が成立した時代には、すでに主観化は生じていたわけであるから、その中に、一例、新しい「一タマフ」が混在することも、当然考えられることである。もしも、そのように考えられるとすれば、これが、次の平安時代における、代表的な尊敬語の形式となる「一タマフ」の文法化の過程であるということになる。

いずれにせよ、「一マス」に代わる尊敬語の形式として選ばれたのは、「(イ)マス」ではなく、「一タマフ」であった。そして、そこでは、上位者から下位者への行為の方向性を示す意味が、関与していたと考えられる。

続く平安時代は、尊敬語として「一タマフ」全盛の時代であるが、その中でも高位の人物の行為を表現する際には、「(サ)セタマフ」と

いう表現が用いられた。これは、使役の助動詞を用いた表現で、極めて高位の人物が何かをする場合には、本人が直接為すことはなく、誰かに命じてさせたために、必ず使役と併用されると説明される。

では、この「-（サ）セタマフ」という表現は、これ以上文法化されることはなかったのか、という点については、今後の検討に値する問題であると考えられる。

さらに、「-タマフ」に次いで出現するのが、現在も用いられる「-（ラ）ル」の形式である。

辛島（2003）によれば、「-（ラ）ル」という形式は、訓点資料、および、院政期以前の和文資料でも一般的ではなかったが、古文書においては早く平安時代の初期から確例が見出されるという。同書は、古文書に見られる「ル・ラル」について、尊敬とも受身とも解される例が非常に多いことと、相手に希求する文で多用される（従って、尊者は、文書の宛名の人物となる）ということを描している。さらに、古文書では、「AガBニCサレル」という受身文は少なく、「AガBヲCスル」という行為を話し手が蒙る」という間接受身文が多く、そこには「受益の気持ちが強くと表現されている」と述べ、次のような例があげられている。

- 6 請被永停止以公浪人被補人太神御領名張山預職状。…。望請、祭主裁。永被停止件山預、盡功能以神戸預等子弟、長奉件預。仍注愁状、請裁。
（天慶九年八月二六日 伊賀國神戸長部 解案）

上には、三つの「被」があるが、該当するのは、傍線を施した二例である。一つめは、状のタイトルで、「依頼相手である「祭主」が、「公浪人が太神御領名張山預職に補人されること」を、「停止」する」という行為を書き手（依頼主）が「被」る状と解釈される。二つめは、同様に「祭主」が、「件の山預」を「停止」することを「書き手」が「被」り、とあるが、その後、「働きと腕前をつくして、わが子弟を預かりに報じたい（辛島 2003）」と、書き手主体

の文にそのまま続いていることから、より、その構文が明確である。

つまり、尊敬を表す「-（ラ）ル」という形式は、本来受身を表す形式であって、尊者の行為を、話し手が尊者からの恩恵として受け止めるという意味から拡張した表現であるといえる。

これは、「-タマフ」と似た発想であるが、「-タマフ」の場合は、「尊者ガ与える」わけであるから、尊者を主体とした表現であるといえる。それに対して、「-（ラ）ル」の場合は、「話し手が被る」わけで、話し手を主体とした表現であるという点で異なっている。つまり、「-タマフ」が尊敬語となったメカニズムよりも、「-（ラ）ル」が、尊敬語となったメカニズムのほうが、より、話し手側の主観の関与が大きいとも言えるだろう。

また、宮地（1975）が述べるように、尊者からの「恩恵」を表明することが、「敬意」の表現につながるといふ発想は、平安時代には見られなかったものである。

中世になって現れるのが、「御-アル」「御-ニナル」「御-ナサル」「御-ヤル」など、「御」をつけた動詞の連用形（或いは漢語）に、「アル」「ニナル」「ナサル」「ヤル」といった語を付け加える形式である。次にその一例を挙げる。

- 7 いかにかシャント、わがまだ生きて居る中に、別の妻をば何としてお持ちあらうぞ？
（天草本伊曾保物語）
- 8 御意のごとく、早々おくだりなされてよう御ざらふ。
（虎明本狂言集・入間川）

このうち、「御-ナサル」については、前代からあった「ル」を用いたものであるが、残る「御-アル」「御-ニナル」「御-ヤル」という形式によって、尊敬の意味を表すことができたのはなぜであろうか。

これらに共通する「御+動詞連用形」（次第に「御」のない形も用いられるようになるが、基本は「御-」である）の部分は、「尊者の-という行為」のように、尊者が何か行うことを、いったん尊敬語つきの名詞として表現するもの

である。そして、「その行為がアル」「その行為をするという状態ニナル」のように、尊者を主語とせず、事態を主語として間接的に述べなおしている。「ヤル」は、後に述べるように、「アル」からの変形であると考えられる。) 逆に言えば、尊者の行為を直接的に述べることは、失礼であるために、それを避けたということもできるだろう。

このように、尊者の行為を間接的に述べることで尊敬を表していた(以後「間接化」と呼ぶ)「御-アル」「御-ニナル」といった形式であるが、「御」がはずれて用いられることも多く見られるようになる。同時に、「御行キアル」→「行キアル」→「行キヤアル」→「行キヤル」→「行キヤル」のように、渡りの子音が拗音化し、そこから「ヤル」の形が文法的要素として独立して、「-ヤル」という形式も生まれる。

こうなってしまうと、本来「御-アル」が持っていた、間接化の機能は失われ、尊敬専用の形式となるのである。

この、「御-アル」の敬語化に見られたような、間接化の方略は、「(ラ)ル」が発生した時点において、尊者を主語とするのではなく、「話者が被る」のように、話者を主語とする構文をとっていたことも通じる。

同様に、現代名古屋方言の、「-テミエル」という尊敬語の形式も、間接化によって成立したものであると推定される。

「ミエル」という形式は、

9 明日、先生は学校に見える。

(「居る」または「来る」の尊敬語)のように、本来、尊者の存在を、「話し手が認識する」ということに言い換えて表現したものであると言える。しかし、「-テミエル」という形式は、それだけにとどまらず、次のように、「-テイル」「-テクル」の尊敬語としても用いられる。

10 清水さんがこの研究所が完成する前から勤めてみえたことを、インタビューするまで知りませんでした。研究所の変遷を

目の当たりにしてみえたわけで…

(核融合科学研究所広報室だより)

11 als の会発足一年半、その間の会員の方々や支えてみえたスタッフの方々のご苦労を考えるには想像もつきません。

(みえ als の会 web ページ)

これらは、確かにまだ、「イク」「クル」という存在の意味を表す語をベースにしている。しかし、すでに「イク」「クル」自体がアスペクト形式として存在や移動の意味を失っており、「ミエル」についても、「存在の認識」という意味は完全に失っているといえるだろう。

さらに、この間接化という方略は、現在進行中の新しい敬語表現においても、認めることができる。

たとえば、近年、接客場面でよく用いられる、

12 ○○でよろしかったでしょうか。

という表現は、従来、

13 ○○でよろしいでしょうか。

と言われていたものを、丁寧にしようとして生まれた表現である。この場合、従来の10の言い方に主語を補うとすれば、

14 あなたは○○でよろしいでしょうか。

となり、尊者を主語とする表現となる。それに対して、9は、

15 私が○○と認識していることはよろしかったでしょうか。

となり、話し手の認識を主語とする表現に変わるのである。

以上、上代から、大きく現代まで、様々な尊敬語形式の成立を概観してきた。

その結果、社会的上位者から下位者への物品の移動を比喩的に用い、主観化することで成立した「-タマフ」、尊者の行為を間接化し、同時に受惠を表明することによって成立した「(ラ)ル」、尊者の形式の間接化によって成立した「御-アル」→「ヤル」、「御-ニナル」の系統を観察することができた。また、現代においても、進行中の、「ヨロシカッタ」、「-テミエル」という形式も、間接化の方略が働いたものであることを述べた。

つまり、中世以降の尊敬語は、「上下」に関わる発想によってではなく、話者の受益と、尊者の行為を間接的にとらえ、話者側の認識によって表現することによって成立しているということがいえる。

3. 対者敬語形式の変遷

対者敬語、すなわち聞き手に対する敬語は、大きく二種に分けることができる。話題の位置づけに関わりなく、基本的にすべての文末（あるいは句末）に用いて聞き手への敬意を表す「丁寧語」（現代語の「です」「ます」「(で)ごさいます」）と、行為の主体が聞き手に対して下位である場合に用いて、聞き手に対する敬意を表す「丁寧語」（「致す」「参る」「おる」）である。

上代は、「丁寧語」「丁寧語」いずれも用いられない、対者敬語のない時代であったと考えられる。

日本語における最初の対者敬語は、平安時代の、「ハベリ」「タマフ（下二段）」である。これらの語は、丁寧語と丁寧語の中間にあたる性質を持っていたと考えられる。

まず、平安時代の「ハベリ」は、尊者を主語とする動詞には用いられない。たとえば次の例は、隨身から主人に向けての発話で、基本的に「ハベリ」（傍線部）が用いられている文である。しかし、尊者が主語となる場合には、波線を施したように、「ハベリ」は用いられない。

16 (惟光から源氏へ)「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。さるべきにこそよろづのことはべらめ。人にも漏らさじと思うたまふれば、惟光下り立ちてよろづはものはべる。」(『源氏物語』夕顔)
これが、現代語であれば、

17 何をいまさらくよくよなさいます。

(古典文学全集現代語訳)

のように、尊者を主語とする文でも、尊敬語「なさる」に丁寧語「ます」を重ねることで、素材である行為の主語と、聞き手に対して同時

に敬意を表すところである。このように、尊者を主語とする場合に用いられないということは、「ハベリ」が「主語を下位に位置づける」という意味を持っていたためであると考えられる。

では、「丁寧語」であるかといえば、そうでもない。というのは、この時代の「ハベリ」はすでに、自己側を主体とする語にのみ付される形式でもなくなっていて、たとえば、次のように、「雨」という自然物を主語とする場合にも用いられる。

18 雨の降り侍ればげにさも侍らむ。

(『枕草子』大進生昌家に)

このように、平安時代における「ハベリ」は、自己の行為を低く位置づける機能を持つという点で、「丁寧語」の一手手前の段階にある対者敬語であったといえる。

これは、「ハベリ」が、そもそも、素材敬語である被支配待遇から転化したものであったことによる。さらに遡れば、「貴人の傍に伺候する」という、実質的な意味を持つ動詞であったと推定される。石坂(1944)は、上代の「ハベリ」について、

①「貴人の傍に仕える(伺候する)」という実質的な意味。

② 本当に貴人の傍に存在するわけではなく、尊者への待遇の意識から、「人が存在する」ことを「尊者の支配のもとに存在する」と表現する意味。

の二種類があったことを述べた。この、①から②への転化は、次のような主観化のメカニズムによるものである。

「ある人物が貴人の傍に伺候する」ことを表す表現を、実際には「仕える」という動作をしていない、ある人物の存在を表す際に用いる。このことで、その人物は、尊者の支配下に存在していると話し手が認識していることが表現されることになり、それによって、話題の中には登場しない、尊者に対する話し手の敬意が表現されるのである。これが、「被支配待遇」と呼ばれるもので、発話場面における聞き手に対してではなく、第三者である尊者に対して向けら

れた敬意なので、素材敬語に分類される。

その、被支配待遇（素材敬語）が、どのようにして、対者敬語となったのか。

森山（2006）では、『古今和歌集』詞書では、若干の例外を除いて、存在の意味に限定して用いられていた「一ハベリ」が、『竹取日記』『落窪物語』『蜻蛉日記』といった、10世紀の他の仮名文献では、存在を表さない場合にも用いられるということ了指摘した。また、同時に、『古今和歌集』詞書では、話し手よりも上位の者を主語として「一ハベリ」が用いられるのに、10世紀の他の仮名文献では、話し手よりも上位者を主語として「一ハベリ」が用いられないことも指摘した。つまり、10世紀の仮名文献の「一ハベリ」が、先に述べたような、「丁寧語」と「丁寧語」の中間に位置するような性質を持つものに対して、『古今和歌集』詞書の「一ハベリ」は、若干の例外を除いて、上代の被支配待遇と同様に用いられていたということである。

前稿では、この違いを、単なる歴史的な前後関係だけによるものではなく、『古今和歌集』詞書が発せられる場と、他の仮名文献における会話文の発せられる場との違いに求めた。

すなわち、天皇を前にした被支配待遇は、「尊者」＝「聞き手」という場面で用いられる。天皇のみならず、それと似たような状況は、より下位の主従関係においても同様に生じる。そこで用いられる表現が、よりインフォーマルな、超越的な尊者がいない場面における改まった表現として援用され、結果的に聞き手への敬語となり、被支配待遇的な意味から拡張し、本来用いられなかった、存在の意味を表さない場合にも下接するようになっていったのではないかと考えたのである。

一方、この時代、「一ハベリ」と、ほぼ同じ機能を果たし、上接語の違いによって、相補的に用いられていた対者敬語として、「一タマフ（下二段）」がある。相補的とは、「思ふ」「見る」「聞く」といった知覚動詞につく場合には「一タマフ（下二段）」が、それ以外の動詞には「一ハベリ」が用いられていたことをさす。

「タマフ（四段）」（上位者から下位者に物品を給する意）の受身形である、「タマフ（下二段）」が、どのようにして対者敬語として用いられるようになったか、また、「一タマフ（下二段）」は、なぜ知覚動詞に限定して用いられたかといったことについては、さらなる検証が必要である。

その後、平安後期には、「一ハベリ」も荘重な語感を持つ古語となり衰退した。代わって、「一ハベリ」同様に「貴人のもとに居る」という原義を持つ「一候フ（サブラフ・サウラウ・ソロ、他）」が多用され、院政期には丁寧語として機能するようになった。書状などでは、「候文体」として、すべての文末に「候」が付されるようになる。「候」が、改まった場面での文末表現として定着し、行為の主体を下げるという本来の意味も失われて丁寧語として成立したわけである。

この「一サフラフ」は、11世紀半ばから、ほぼ「一ハベリ」の後を追うような形で、主観化、間主観化の経緯をたどり、対者敬語となっていく。この間の経緯については、Traugott & Dasher（2002）（6章5節）に詳しい。

同じような機能を持つ、「一ハベリ」と「一サフラフ」がなぜ交替したのかについては、森野（1971）が指摘するように、「一サフラフ」は、当初話し手が男性である場合に集中していたこと、書状類を中心に広がったことから、すでに女性たちによって頻繁に使われていた「一ハベリ」に替わって、より「謹肅、畏敬感が強く表示できる」新たな形式が用いられたということであろう。

次いで、室町時代に入って話し言葉の中でさかんに用いられた対者敬語は、尊敬語出自の「オヂャル」「オリャル」「ゴザル」の系統である。

金水敏（2004・2005）は、謙譲語に起源を持つ語が丁寧語となるのは、敬意の向かう方向が重なりやすいことから自然であるのに対して、尊敬語を起源とする語が丁寧語となるのは、変化の経路が異なっているはずだと述べる。また、

それが可能であった理由を、「オヂャル」「オリャル」「コザル」が存在詞であったことに求めている。すなわち、存在詞には、

20 あそこに〇〇さんがいる。

のように、「空間的に存在する」ということを表す場合（空間的存在文）だけではなく、

21 被害にあった人がたくさんいる。

のように、「ある条件を備えた人がこの世界にいる」ということを表す場合（限量的存在文）がある。空間的存在文では、必ず尊敬語が必要とされるのに対して、限量的存在文では、

22 花族も栄耀も面をむかへ肩をならぶる人なし。 (『覚一本平家物語』)
のように、必ずしも尊敬表現でなくてもよい。

しかし、尊敬表現を用いてはいけなわけではないから、そこで使われた尊敬表現が、聞く側からは丁重表現と「誤解」されることで、丁重語的な使い方が広がった蓋然性があるという推論である。

考えてみれば、前代において素材敬語から対者敬語に移行した「一ハベリ」「一サフラフ」もまた、存在の表現であった。これらの場合にも、限量的存在文が、対者敬語化の契機になったかどうかということは定かではない。

むしろ、「一ハベリ」の、『古今和歌集』での用法を見ると、

23 みこの宮のたちはきに侍けるを (966)

24 中納言源の朝臣のあふみのすけに侍ける
とき、よみてやれりける。 (740)

のような、「～ニハベリ」という形や、

25 めのおとうとをもて侍ける人に (868)

26 昔あひ知りて侍ける人の、秋の野に逢ひ
て物語しけるついでに、よめる (219)

のような、「動詞+テ+ハベリ」といった、「一ニアリ」「一テアリ」という、文法化した「アリ」に対応するものが目立つ。

確かに、本動詞の「アリ」のほかに、これら、「ニアリ」「テアリ」を含めると、普通の談話の中で、「アリ」の出現する頻度はかなり高くなる。

たとえば、『蜻蛉日記』に見られる道綱母が

兼家に宛てて書いた遺書にみられる、「一ハベリ」の使用の状況を見てよう。

27 「命長らふべし」とのみのたまへば、見果て奉りてむとのみ思ひつゝ、ありつるを、
限りにもやなりぬらん、あやしく心細き心ちのすればなん。

常に聞こゆるやうに、世に久しきことの、いと思はずなれば、塵ばかり惜しきにはあらで、たゞこの幼き人の上なん、
いみじくおぼえ侍るものはありける。

たはぶれにも御けしきのものしきをば、いとわびしと思ひてはんべめるを、いとおほきなることなくて侍らんには、御けしきなど見せ給ふな。いと罪深き身に侍るは、(歌省略)

侍らざらん世にさへ、うとうとしくもてなし給ふ人あらば、つらくなんおぼゆべき。年ごろ御覧じはつまじくおぼえながら、かほりもはてざりける御心を見たまふれば、それ、いとよくかへりみさせ給へ。

ゆづり置きてなど思ひたまへつるもしく、かくなりぬべかめれば、いと長くなん思ひ聞こゆる。

人にも言はぬことをかしの聞こえつるも、忘れずやあらんとすらん。折しもあれ、対面に聞ゆべきほどにもあらざりければ… (歌省略) (『蜻蛉日記』)

上記の一続きの文章には、四角でかこった通り、五つの「ハベリ」が用いられているが、そのうち、

28 侍らざらん世にさへ

の1例は存在の意で用いられている。残る4例についてみると、

29 いみじくおぼえ侍るものは…

30 いとわびしと思ひてはんべめるを…

31 いとおほきなることなくて侍らんには…

32 いと罪深き身に侍るは…

というものであり、動詞連用形に直接する補助動詞は29だけで、30と31は「一テアリ」に対応するもの、32は「一ニアリ」に対応する

ものであるといえる。

そして、この一続きの文章全体を見ると、必ずしも、すべての述部について「一ハベリ」が用いられているわけではないこともわかる。

「一ハベリ」が付された以外の述部から、すでに尊敬語や謙讓語が付されたもの、および、「一ハベリ」と相補的な分布をしていた「一タマフ（下二段）」（二重下線部）を除くと、ゴチックで表記した13例の述部が残る。そして、そのうち、「アリ」の形をとるもの（下線部）が7例をしめる。

『蜻蛉日記』の時点では、対者敬語の使用というのは、いまだ必須のものではなく、部分的に用いられているにすぎない。しかし、もしも、これらの「アリ」が、すべて「ハベリ」となれば、18の述部に12の「ハベリ」が用いられることになる。こうして、「ハベリ」の文体というものが生じていくのではないだろうか。

存在を表す動詞を起源とする「一ハベリ」や「一サフラフ」「ゴザル」といった語が、文体的要素を有する丁寧語へと移行しやすかったことには、ここで見たように、「テアリ」「ニアリ」といった文化化した「アリ」の存在によって、文における「アリ」の出現頻度が高いということも関与するのではないかと考えられるのである。

そういった観点から見ると、中世以降に発達し、現代の「一マス」へとつながる丁寧語「マラスル・マッスル・マッスル」は、前代になかった性質を持つといえるだろう。「一マラスル」のもの形は「一参らする」で、中古には受け手尊敬の謙讓語として機能していた語であり、「存在」を起源としないからである。また、「一マラスル」は、動詞のみに直接する丁寧語であって、名詞や形容詞にはつかないという点でも、新しい性質を持つといえるだろう。つまり、現代語における、動詞に下接する場合には「マス」が、形容詞に下接する場合には「デス」が用いられるという丁寧語の使い分けの起源は、この時代に生じたといえる。そのことが、丁寧語の展開の中で、どのような意味を持つのかと

いうこともまた、興味深い問題であるといえる。

3. ま と め

以上、日本語の素材敬語（うち、尊敬語）と、対者敬語の歴史的な展開について、文化化のしくみの観点からおおまかな概観を試みた。

その結果、尊敬語については、上下間の物品の移動の発想による表現から、間接化、受惠の表明といった流れを見出すことができた。

また、対者敬語については、改まった場面で使用される表現の用法の拡大によって発生したこと、また、その表現が、対者敬語として定着する上では、文章中で頻繁に用いられることが必要であり、そういった意味で、尊敬語出自、謙讓語出自ともに、存在表現からの転用が行われた可能性があることを指摘した。

本文中でも述べたとおり、まだまだ未解明の事柄も多いが、こういった観点からの検証を積み重ねることは、日本語の敬語のあり方の歴史的な展開に、新たな視点を提供するのではないかと考えられる。そのことはまた、現代日本語の敬語形式のあり方を客観的に把握する上でも、大きな示唆を与えるものであるといえるだろう。

(参考文献)

- 石坂正蔵（1944）『敬語史論考』大八洲出版
 大堀壽夫（2005）「日本語の文化化研究にあたって—概観と理論的課題—」（『日本語の研究 1-3』日本語学会）
 辛島美絵（2003）『仮名文書の国語学的研究』清文堂
 金水敏（2004）「日本語の敬語の歴史と文化化」（『月刊言語』33-4 大修館）
 金水敏（2005）「日本語敬語の文化化と意味変化」（『日本語の研究』1-3 日本語学会）
 宮地 裕（1975）「受給表現補助動詞『やる・くれる・もらう』発達の意味について」（『鈴木知太郎博士古稀記念国語学論攷』桜楓社）
 森野宗明（1971）「古代の敬語Ⅱ」（『講座国語史 5 敬語史』大修館）
 森山由紀子（1998・1999）「古事記における補助動詞『一たまふ』の用法」（『国語語彙史の研究』大修館）

究』17・18 和泉書院)

森山由紀子 (2006) 「日本語における対者敬語の成立 — 『古今和歌集』 詞書にみる 「ハベリ」 文法化の過程 —」 (『語用論研究』 8号日本語用論学会)

吉野政治 (2005) 『古代の基礎的認識語と敬語の研究』 和泉書院)

Traugott, E. C. and R. B. Dasher (2002) Regu-

larity in Semantic Change, Cambridge University Press.

(付記)

本稿は、2005年度同志社女子大学専従研究員として同志社女子大学より国内研究助成を受けた研究成果の一部である。